

はじめに

理事長室の書棚には、1987(昭和62)年度(通巻第18号)からの東京都予防医学協会(以下、本会)の年報が具備してある。國井長次郎・初代理事長の執筆による「はしがき」に目を通した。國井氏は銅像でしか拝見したことがないが、その文章に触れると威厳ある人柄を知ることができる。

驚いたことに國井氏は文学者であったそうである。その文学者が、小泉丹氏、森下薫氏、小宮義孝氏ら寄生虫学者の薫陶を受け、寄生虫予防に身を挺したくだけりがある。これこそまさしく予防医学の核となり、本会の礎が築かれたのである。この辺の歴史は、山内邦昭氏、近泰男氏らが饒舌に語ってくれて、新参者の筆者もいつしか人並みに予防医学を知るようになってきた。

國井氏は、予防医学の主座は健診と健康教育であると論じている。その哲学を引き継ぎ、本会の年報は学校保健、産業保健、母子保健、地域保健の分野において克明にその歴史を著してきた。1996(平成8)年4月18日、國井長次郎氏は逝去されたが、その後も本会は衰退することなく、稲見一清・第2代理事長に引き継がれたのである。

稲見氏は國井氏の意味を受け継いで、予防医学運動と健康教育運動をよりいっそう推進する決意を述べた。1998年3月発行の通巻第27号から北川照男・第3代理事長が執筆を開始した。通巻第44号まで実に18巻の「はしがき」を担当している。これは19年間の長きにわたり理事長職を全うしたことを意味する。筆者は2015年6月29日、第4代の理事長を拝命した。

改めて本誌の歴史を紐解くと、その重みと重厚さに圧倒される。時代の流れとともに本誌の内容も学校保健、地域・職域保健、母子保健、がん検診へと分類が変化したが、その内容の豊富さ、重厚さは変わらない。本誌が学術誌として引用文献に使用されていることは喜ばしいことである。特に、30年余りにわたり執筆を継続してきた村上睦美先生、村田光範先生、および前田美穂先生をはじめ、各ジャンルにおいて執筆いただいた諸先生に深甚なる謝意を表す。

40万人あまりを対象とする本会の検診・健診事業は、まさしく予防医学の真髄であり、かつて韓国の健診協会が本会を模倣したように全世界に広まることが肝要と考える。このため本誌もいずれは英文化する必要がある。

2016年3月

公益財団法人東京都予防医学協会
理事長 小野良樹